

しつこいセフレを萎えさせるために露骨 アピしてみたら、射精を制限された上で ぐっちゃぐっちゃに抱かれた

体験版

攻め：仙波

受け：村井

要素：襲い受け、受けフェラ、攻めフェラ、アナル舐め、射精管理、特殊イキ、
尿道責めなど

今日は俺が奢るからと呼び出した、完全個室のすき焼き屋の一室。甘辛いタレが絡まった大きな肉を卵に付けて、お互いに1枚ずつ食べた時。俺は目の前の友人に、唐突に悩みを相談した。

「しつこく言いよってくるセフレとの縁を切りたいんだけど、どうしたらいいと思う？」

「あ、あの人とまだ続いていたの？でもセフレと上手くやりくりするのは、村井くんの方が得意じゃない？」

「相手に振られるのは猫山の得意分野だろ。100連敗の記録保持者なんだからアドバイスくれよ」

「ひどい！ひどすぎるよ！今は続いてるし！過去イチ長続きしてるから！」

さっきまでは、豪華だね、すごく美味しそうと目の前の料理に顔をほころばせ、笑顔を俺に向けていた猫山が牙を向いてきた。柔和な彼といえど、自分の恋愛経験をボロカスに言われればそうなるだろう。とはいえ、今は彼の力が最も発揮されてほしい瞬間でもあった。

俺の友人である猫山は、基本的にいいやつだ。しかし、こと恋愛となると何かが下手くそで、付き合っては別れ、振られと百戦百敗の記録保持者だった。現在は落ち着いているようだが、その経歴は俺の知り合いのなかで群を抜いていて、もはや伝説級だ。だから彼の力を借りれば、いい加減に忌々しきセフレ、仙波クン野郎との因縁に決着をつけられるのではないかと思い、本日飯で釣って呼び出した。

ここまで来て無駄足になるのも嫌だし、猫山という友達を失うのも悲しい。なので、まずはバカにしているわけではなく、自分の悩みが深刻であることを彼に説明し、知恵を貸してほしい事情を話す。

「いや、悪口じゃないんだこれは。相性がよくないんだよな、今のセフレ。だから切りたいんだけど、どうあがいても縁が切れない。マジで頼む、俺には手に負えないんだよ」

「村井君をここまで困らせるとは…。やり手だよね、そのセフレさん。言われてみれば村井君の方も珍しく長く続いてそうだけど、別にその人が好きってわけじゃないのか」

「そう。むしろ嫌い。それを向こうには言ってんだけど、とにかく話が通じない。多分縁切りするなら相手側から切ってもらうしかないけど、俺が何言っても響いてないっぽくて病んでる。ってわけで、別れのスペシャリストの手を借りたい」

「ううん、なるほど…」

煮えた野菜をよそってやりながら相談内容を話すと、彼は顎のあたりに指を置いて少し俯く。ふむ、と小さく息を吐いて考えてくれている様子を見ると、やはり彼はいいやつだと毎回思う。そしてほどよく具材が盛れた器を彼に差し出すと、猫山は自分が考えた縁切り案をいくつか提示してくれた。

「もう会いたくないって、しつこく連絡するとかは？」

「向こうから連絡来た時にも、会ったときにも次はやめろって言ってるのに、更にこっちから言うのは変じゃないか？」

「えっ、そうなの？お相手さんメンタル強いな…。じゃあ、村井君の方からセフレの人に嫌いって素直に言うのは？」

「それも言ってる」

「そっ、そっか。いやでも、嫌われても身体の相性がいならアリ、みたいな感じなのかな？付き合ってるんじゃないくて、セックスが目的の関係なんだもんね。」

そういう相手に対して、顔を見るのも無理なくらい嫌われるって、実は難しいのかも」

「そうなんだよな。俺からは全てにおいてめちゃくちゃ断ってる。フル無視されてるけど」

「やば…。強敵だね、これは確かに解決が難しいやつかも…」

渡した器を両手で受け取った猫山は、それに口を付けずにテーブルに置いてからも、うんうん唸って考えていた。相手から振られる専門家をここまで悩ませるなんて、さすがの悪魔だ。こんなところで感心しても仕方がないが。しかし今日用意した武器は、俺のなまくらよりよっぽど鋭利だ。ぱっと顔を上げた猫山は、期待通り俺には目からうろこな発想で攻める作戦を閃いた。

「じゃあここは、押してダメならもっと押してみろって作戦はどうか？次は逆に、ものすごーく村井君らしくないことをしてみたらどう？」

「俺らしくないって、例えば？」

「セフレさんは、今の村井君を気に入ってるんだよね？だから正反対のことをすれば、一気に萎えて他を探してくれるかも！」

「…なるほど？反抗的にならないで、積極的に行くってことか」

「なるべく村井君のキャラじゃないことをふんだんに盛り込んだ方がいいよね。嫌かもしれないけど、その一回で終わりと思えば」

「いや、ありだろ、全然あり。確かに向こうの事が嫌過ぎて、俺からはあんまり誘わないからな」

「なら決まりだね！よし、そしたら一緒に『ありえない村井君でガン萎え』作戦、考えていこ！」

よし、と意気込んで、少し冷えた器から野菜を頬張る猫山からは、俺には考えられないアプローチが何個も出てきた。今までは、なぜ相手にされないのかと泣く猫山のメンタルケアをしていた俺が、まさか彼からアドバイスを受ける立場になろうとは。

とはいえ、相手を切りたいなら彼以上のプロはいない。ここで先生の見解をしっかりとメモして、決行の日に向けてしっかり予習しておこうと、熱心に猫山からの個人レッスンを受けた。

そして会談から約三日後。かましていくぞと意気込んだ俺が電話をかけると、相変わらずの速度で電話が繋がる。

「あ、もしもし仙波さん？あのさ、たまには仙波さんの家に遊びに行きたいんだけど、どっかで休みの日とかない？いやいや、するなら今日でもって気持ちはあるよ？でも、とことん朝までしたいって気分なんだよね。そう、せっかく仙波さんちに行くならお泊りがいいじゃん？だから、ぐっちゃぐちゃになるくらい濃い目のやつしたくて。うん、うん、おっけ、じゃあ明後日ね。場所はあとで送って。うん、楽しみにしてる。じゃあまた」

そして言いたいことだけを言ってから電話を切り、ぶるりと全身を震わせた。自分らしからぬ言動に、デレつく奴の声、全てに寒気がする。しかしこれも全ては

奴との縁を切るため。これくらいでめげてはいけないと、作戦の途中経過を猫山に報告した。

ナイストライ！と返ってくる言葉に、メンケアされているのは俺の方だ。このくらいでひよっている自分が情けないが、今は明後日まで心が折れないことが大事だと思う。でもいざとなったら嫌になりそうなので、いっそその前に世界でも滅亡しないかと、とんでもなく他力本願なことを願っていた。

だが俺の願いも虚しく、世界は平和に時間を進めた。指定されたマンションの前で、本日18回目のため息をつく。予想通り立派なこの建物、もとい悪魔の巣に来るのは今日が最後になってほしい。そのためには今からのふるまいにかかっている。ガン萎え作戦が成功するためには、らしくないことを全力で行う必要があるのだから。

入口のオートロックを解除してもらって、更にエレベーターまでロック解除しなければ上に行けない強固なセキュリティを抜けて、部屋の前にあるチャームを押す。ほどなくして扉が開いたので、相手から挨拶をされる前に抱きついた。

「仙波さん、会いたかった」

「わ、村井君。どうしたの今日は」

「え？ こういうの嫌い？」

「ううん、僕は好きだよ。君に僕を騙そうって気がなければの話だけど」

「ないない。今日はそういうのないんだって」

どことなく洒落た部屋着が鼻につくコイツを目に入れるだけでもイライラするのに、自ら密着していくなんて吐き気がする。一生会いたくない相手にこんな素振りができるなら、きっと俺の生まれ変わりは俳優だ。

それに、奴は俺に疑いの目を向けているが、今日は騙すために来ているわけじゃない。あくまで特攻を決めて、仙波クソ野郎に萎えてもらうのが真の目的だ。けれど、コイツは妙に勘がいい。もたもたしてペースを奪われる前に、事を始めていかなければ。

抱きついて玄関に入り込んでからは、キスしてすぐに彼のズボンを下ろした。下着を口で咥えて中のモノを引きずり出すと、既に半勃ちの熱が顔を見せる。ためらいなく口を付けると、さすがの彼も驚いたようで声が上ずっていた。

「ずっ、随分熱烈だね？」

「うん。俺はシャワー浴びきてるからすぐできる」

「僕が浴びてなくてもいいの？」

「どっちでもいい。もう待てないし」

「っ...！」

「ん、む、早く欲しい、コレ...」

いつもならアイツが俺を翻弄するばかりだが、先手必勝の作戦勝ちを得たせいか、奴は珍しく焦っていた。うわ、と言いながら頬を染める様子を見るなんて初めてのことじゃないか。よし、いいぞ、これは完全に俺のペースだ。

何度かコレを口にしてはいるが、大体アイツが俺に舐めさせるときは玩具が入っていたり、どこかを責められていて実力が出し切れないことが多い。今はそういったマイナス要素がないのも追い風だ。ここで奴の精力を削ることは、今後の俺のためにもなる。攻撃力は減らせるだけ減らしておいた方がいい。

「ふ、む、ん、んん...！」

「う、あ、村井君、喉までいけるの...！」

「んう、ふ、ふ、ふふ...」

やれば誰とでも、という緩い貞操観念で相手を探している俺は、アプリで見たら80点くらいだったのに、実際会ったら36点くらいだった、なんて出会いもザラだ。そんな時にはどれだけ素早く事を終わらせられるかが重要になる。入れさせる気にもならない相手の場合は、揉め事を避けるためにこうして深いフェラをして乗り切っていた。培ったスキルが奴にも発揮されているのは、悪い気がしない。つつい喉の奥から笑いが零れる。その振動の心地よさに目をつむって、俺の頭を抱えて悶える奴の表情ときたら。この家の玄関の、よく見えるところに額縁に入れて飾ってやりたい。

ぐぐう、と喉をすばめてすすると、う、と上からうめき声が聞こえてきた。出る瞬間に向けて構えておけば、口内に放たれても驚かずにいられる。普段なら飲めと言われても奴の顔面に吐き出してやるどころだが、今日は特別大サービスで飲み込んでやった。ついでに玉の間から側面まで、丁寧にお掃除フェラまでしてやると、奴はほくほくと顔をほころばせている。

「うわ、今日はそこまでしてくれるんだ」

「だって、こぼしたらもったいない」

「気持ちよすぎてすぐに出しちゃったよ。フェラ上手いんだね、村井君って。いつもは中途半端に舐められてばかりだったから、全然気づかなかった」

「中途半端にしか舐めれないようにしてたのは誰だ？」

しかし、仙波クソ野郎はどこまでも仙波クソ野郎だった。例えフェラで即イキさせようと、デリカシーが死んだ発言をしてくるのは相変わらずだ。しゃぶれないぐらい責め立ててくんのはお前だろうが。いつも滅茶苦茶イカされてなきゃ俺だってこれくらいと、こめかみに青筋が浮かぶが、根性で静める。

危ない。そうだ、今日はこういう俺ではダメなんだ。積極的で、エロかわいいビッチを演じなければ。なんでも口答えするネコはかわいくない、常に欲しがり続けようと話し合ったじゃないか。素を出すな、押し殺せと深呼吸してから、頭を撫でる相手の腰に腕を回して抱きつく。

「ま、まあ、たまにはガチフェラも悪くなかったろ？てか、一回出して終わりじゃないよな？俺はまだまだ足りないし」

「もちろん。僕はここでもいいけど、どうする？」

「せっかく来たから、仙波さんのベッドでしたいなあ」

「待ちきれないなら、すぐに村井君も抜いてあげるけど」

「いっ！？いや、アレは俺がしたかっただけだからっ！ほ、ほら、盛り上がって汚したら悪いし、早くベッド行こうぜ」

だが、油断をするとすぐ奴にペースを乗っ取られてしまう。ふとしたときに、俺の尻側に手が回っていて焦った。手の早い男め、油断も隙もない。玄関先で泣くほどハメられるなんて嫌すぎる。それに、今はまだ俺が主導権を握っているが、手綱が向こうに渡ったら大変だ。アイツに責められてからベッドに行きたいとねだったとしても、「じゃあ僕のお願いもベッドで聞いてくれる？」とか「もっとおねだりしてくれなきゃ嫌だなあ」とか、とんでもない条件を突きつけられる可能性がある。いや、十中八九そうなる。その前に、体の負担が少ないベッドに行った方がいい。

奴に流れを持っていかれる前に、素早く立ち上がった。そのまま何かあったら悪戯してきそうな手をいなしつつ、目的の寝室に移動する。どうにか無傷でたどり着いたので、ここからは作戦の第二段階に移行だ。

「ねえ、今日は初めて仙波さんの家にお泊りじゃん？だからさあ、気合入れてきたんだよね」

「気合っていうと？」

「見たい？」

「見る物なの？」

「見たら触りたくなるものかも」

ふふん、と鼻を鳴らした俺は、部屋にお似合いの広いベッドに仙波クソ野郎を突き飛ばして、驚きもたつく奴の上にまたがった。そしてまずは上着を脱いでから、はいていたデニムのボタンをはずす。それから奴の手をチャックに誘導して、ゆっくり下におろされていくのを見守る。

「...すごいね。僕、手汗が止まらないくらいドキドキしてる」

「じゃあここで止めちゃう？」

「それはちょっと無理かも」

ウエスト部分が広がると、俺の言っていた「気合」の一部が姿を見せる。それを目にした奴は、俺の下半身にくぎ付けになっていた。なので立ち膝になってから、焦らすようにゆっくりデニムを膝に落としていく。

パタリとベッドにデニムの腰回りのところが落ちると、隠れていた下着が披露される。前側の防御力が非常に少なく、後ろ側は紐になっているせいで、布地がほぼゼロの下着が。膝にからまる生地を少しずつ脱ぎながら身体を近づけていくと、寝転がっていた奴が上半身を起こした。さっそく両手を伸ばして、オープンヒップで素肌が露呈している臀部を揉み始めている。

「うわ...。何これ？すごいのはいてる」

「こういうの好き？」

「大好き」

息を弾ませて尻を撫でまわす仙波クソ野郎を見て、どこか優越感はわく。そうだろう、俺がはいているんだから、魅力が極限まで引き出されていると言ってもいい。ただし奴の評価自体は嬉しいが、狙いが外れた部分もあった。

そもそも猫山との協議においては、アピールが度を越したら相手が引くんじゃないか、という読みだった。だから、このどぎつい下着をはいてきた。俺からグイ

グイ行くことで、あれ、なんかいつもの俺らしくないな、変だなと萎えてもらう予定だったのだが、奴はむしろ昂ってしまったらしい。

ふむ、これは微妙な一手だったなと、俺に抱きついて尻を撫でる奴のつむじを見ながら肩を落とす。とはいえ、こいつの頭は俺たち人間の考えが遠く及ばないところにいる。ペースを俺が握れているだけでも、まだいい調子だと思うことにしよう。

だが、やはり一筋縄ではいかないのが目の前の悪魔だ。奴は見る人が見れば惚れる笑顔で、俺の心がしなしなにめげる発言を平気でしてくる。

「ねえ村井君。このまま僕にまたがって、って言ったらやってくれる？」

「え？今もまたがってんじゃん」

「違うよ、腰じゃなくて。僕、また仰向けになるからさ。そのまま顔の上にまたがって？お尻が真上に来る感じで」

「かっ...、顔？アンタの顔の真上に？」

「うん。立ち膝で体勢がきついなら、ベッドに手をついてもらって」

ほら、と俺をうまいこと誘導しながらも、再度ベッドに仰向けになった奴は、俺の手を握ってベッドの上部へと引っ張ってくる。そちら側に行くと確かにベッドヘッドもあるのだが、問題は俺の下に奴の顔が来ることだ。

またがって、と言ったらやるかだと？やるわけない。やりたくもない。さっさとブチ込めばいいだろ、後ろが空いてるやつをわざわざはいてきてやったんだからと、またしても脳の血液が猛スピードで駆け巡り始めた。誰が好き好んで、明ら

かに悪戯される前提のステージに行こうと思うのか。しかも相手が、あの仙波クソ野郎だというのに。

ひくりと、頬が引きつる。そんな俺を、いい笑顔で奴が見上げている。この野郎、俺のケツで圧迫して呼吸困難にしてやろうかと思うが、多分地獄から這い出てきていると思うので、簡単に窒息死はしなそうだ。

ふうんと、俺はまた深呼吸をした。そう、そうだ、もしかしたらコイツは、嫌がる俺の姿が見たいがために、あえて屈辱的な行為を求めているのかもしれない。だったらあえてノリノリで、奴の言いなりになったほうが萎えるんじゃないのか。よし、初心を忘れるな。嫌な思いも今日で終わりと思えば乗り越えられる。嫌がれば嫌がるだけ思うつぼなんだと言い聞かせて、奴の顔の上にまたがった。そのままベッドの上の部分に手をつく、俺の尻に再び手が伸びてくる。

「っ、ど、どう？こんな感じでいい？」

「うん、ものすごくエッチな眺めだ。できればもっと腰を下ろしてほしいな」

「こう、かな...？」

「うん、うん、そう、お尻が僕にくっつくくらいでいいよ」

しかし、やったらやったでだ。俺が言いなりなのをいいことに、奴は要求を追加してくる。なんでお前の顔に、ヤバい部分を近づけなきゃいけないんだよ。それ、絶対いい結果にならないだろ。嫌なんだが、滅茶苦茶嫌なんだがと冷汗が背につたう。けれど、エロかわいいビッチならば、恥じらいはしてもやるだろう。なら、やるしかない。

少し足を開いて、徐々に腰を低くする。奴の鼻に自分の局部が触れた時には、さすがに頬が熱くなった。なんて格好だよ。こんな無防備なまま責められたら終わりだと唇を噛む。それでも、嫌とは言えない。

「どう？このくらいでいい？っ、て、ちょっ、つく、あぁっ！？」

そして、下ろした臀部をがつつり左右に開かれたかと思ったら、平然と孔を舐められた。ふざけんな、なんか一言くらい言ってから舐めろと思ったけれど、身体を支えることを優先する。この状態で踏ん張れなくなったら、奴の顔の上に落ちてしまう。そのまま責められるのは、俺にとってかなり不利に働く。奴を萎えさせるために言いなりになるのは仕方ないにしても、都合よくやられるのはごめんだった。

そうはいっても、やはりテクだけはある男だ。むに、むに、と尻を上手い具合に揉みながら、孔の際をくすぐるように舌先でつつかれると、勝手に腰が震える。もっと強い快感を求める身体が、腰を押し付けそうになる。だめだ。そんなのコイツの思うつぼだ。耐えろ、耐えて俺がペースを握るんだと、きつくベッドを掴む。

「ふぁ、ぁ、あっ、ん、んんっ！」

「どうする？ここ、舐めようか。それとも、指でいじめてあげようか。悩むなぁ」

「んんう！んくっ、ぁ、は、はっ、ぁ、あぁあぁあ...ッ！」

「村井君、腰が逃げてるよ？ちゃんと足開いて、じっとしててほしいな」

「っ、っ、〜〜〜っくうう...！」

ぎりりと下唇を噛んで、自分の下にいる相手を睨んだ。じっとしろだと？こんなじれったい触り方をして、俺が欲しがるとの待ちだろ、どうせ。俺だって動きたくないかない。身体が勝手にかくつくんだよ、そのくらい分かれ。

けれど、不満たらたら喉に詰まるのは、悪口だけじゃない。もっと、と言ってしまいたい気持ちもせり上がっている。

ぬちり、と少しだけ入ってくる舌先を、奥まで進めたらいいのに。そのために腰が下りているのに。なんでお前の舌もどこかに行くんだ。孔の周りだけ舐めるんだ。いくらでも好きにできる位置にいるんだから、もう一思いにやってくれよと弱気になる。

「うあ、は、あ、ッ、ん、あ、も...！ううう...！」

「今度はお尻が下がってきたね。早くいじめてほしくなった？」

「あふ、っ、あ、あ、あ、ひっ！」

「いつもなら言い返してくるのに、今日は随分大人しいね。本当に欲求不満なのかな？」

「ふ、ふ、っ、ぐ、あ、そ、そう、だって、前も言ったあ...！」

「じゃあこんな風に触られるのは、村井君にとっては切ないだけか。かわいそうだね、期待したのに焦らされちゃって」

「あっ！？あ、ああ、っんんん〜〜〜！！！」

どこまで俺の魂胆を見抜いているのか分からないから、奴に対して下手な態度は取れない。俺の行動全てに裏があるとバレたら、ドン引きさせる作戦が無意味に終わってしまう。わざわざここまで入念に準備をしたのに、無駄打ちになるのは絶対に嫌だ。だからあくまで従順に。従うポーズはとっても、心は折れないように。けれどそう思っている、アイツは簡単に亀裂を入れてくる。

奴はより孔に近い場所に親指を置くと、ぐぐ、と力を入れて孔を開いた。そしてさらけ出された粘膜を、ねとり、ぬるりとゆっくり舐める。1回だけでも心に大きなヒビが入ったのに、2回、3回と続けられると、途端に膝から崩れなくなった。

「ふぁ...！？っ、は、あ、あゝ ああっ...！」

なんだ、なんだその舐め方は。ずるい、滅茶苦茶恥ずかしくて、気持ちよくて、逃げたくなるような責め方だ。この格好じゃなきゃ少しは位置を変えられるのに、じっとしていろと言われた俺は、腰を軽く上下に揺らすことしかできない。嫌だ、無理、それは嫌いだと背を伸ばしてみても、アイツの口が追いかけてきて、しつこく同じやり方を続けられた。

「ひいいい...ッ！い、あ、あっ、ああううっ！」

「どうしたの、逃げ腰になって。これ、そんなに気持ちいい？」

「ッ、っ、や、あ、は、ううう...！そっ、それっ...！もお、いいから！」

「もっと中までしてほしいってこと？」

「っ！？くうううんんっ！！？」

とは言っても、奴は焦らした後の追い詰め方も上手い。もう無理だ、きつい、切ないと切羽詰まってきたところに、ぬぐりと中に舌が入り込んでくる。激しく中をかき混ぜられて吸われたら、次は勝手に腰が落ちた。とてもじゃないが、手をついてなければ耐えられない。

じゅる、じゅるると卑猥な音が聞こえる。吸うな、そんなに激しく舐めてくんないよと思うけれど、エロかわいいビッチなら先を求めるだろうか。ただ、コイツにねだる「もっと」は冗談抜きで滅茶苦茶にされる可能性もある。うかつなことは言えない。でもこのままアイツにペースを持っていかれるのはよくない。考えろ、何かあるだろ、せめて俺が手綱を握れば勝機はあるはずだと、ベッドヘッドを強く握って頭を振った。意識を下半身じゃなく、なるべく頭に持っていかなければ。

「はう、ッ、あ、あああっ！んあ、っ、ね、え、足りない、からあ...！は、早く、奥までしてっ！」

「んん？これは嫌？」

「い、嫌ってわけじゃ、ないけど」

「なら、お尻は指でかわいがってあげようか」

「ふあああっ！？あっ、あ、んうううっ！！？」

どうにか頭をフル稼働させて思いついた案としては、奥をいじれと求めることだった。これなら欲しがっているエロかわいさを担保しつつ、リーチの短い舌か

らの攻撃は逃げられる。よし、ナイス判断だと思ったのも束の間、アイツは容赦なく指を2本ぶち込んできた。

そもそもなるべく速攻で終わらせたかった俺は、中も事前に準備をしていた。だからいきなり入れられても痛みはない。でも俺は、焦らされて敏感になることを予想していなかった。入ってすぐに、前立腺をグリグリ押してくるのも想定外だ。

ふざけんな、散々じれったい触り方してきたくせに、次は容赦なしか。こんなの俺じゃなくてもイチコロだろうがと、強い快感に目を見開く。俺がキャラにもない煽りをすれば、すぐにぶち込むだろうと思っていたのに。その読みが大きく外れた。最悪だ、さっさと入れればいいのに。道のりがいつもと同じか、それより長い。あと、なんでお前の指は俺の良い場所をピンポイントで覚えてんだ。そういうところも憎い。相変わらず全部がクソだと目をつむれば、今度は会陰にぺとりと舌が張り付く感覚が襲う。

「んひっ！？や、あ、何ッ、も、舐めんな！」

「ええ？ちょっとそのお願いは聞けないかも」

「く、う、あ、嫌だっ！や、や、ダメ、そっちは絶対、ッ、ひううう
うっっ！！」

しかし、奴に対する苛立ちはこの程度でおさまらない。俺は中に指が入った時、快感の度合いは一旦置いておいて、単純に舌のかわりに指で責めに來たんだなと思った。だが、アイツは奇想天外な生命体。交換してフリーになった舌はまだ攻

撃手段として健在だった。ここで口休めせず、平然と俺の熱を舐めてくるとは。

なんでそうなる、お前の方こそじっとしておけと歯を食いしばった。

けれど結んだ口は、奴から執拗に自身を舐めまわされると、喘ぎ声を漏らすために開いていく。はむ、はむ、と玉を淡く食んで、裏筋をつたってカリ首を舌先がくすぐる。ここまでは喉の中で堪えていた声が、先端を咥えて舐められた時、どうにもならず決壊した。

「ふ、っぐ、ッ、んンン...！っ、は、あ、や、そこはまっ、あ、あああああ
あっ！！」

ふふ、と下から満足そうに笑う音が聞こえる。咥えながら笑うなんて器用なやつ、と思ったら、よく考えたら玄関で俺もやっていた。なるほど、これはそのお返しらしい。

ただ、奴の思考は読めてもほんの一部だ。だから先っぽを舐められる間、中の良い場所をぐにぐにと揉みこまれた時は、さすがに視界が一瞬白んだ。馬鹿が、前置きもなくドギつい同時責めをしてくるんじゃないと、慌てて意識を取り戻す。ふう、と息をはいて、呼吸を整える。

本来、俺はセックスに慣れているはずだ。快感の受け皿は広く深い方だと思っている。なのに奴は、瞬く間に溢れんばかりの快感を送り込んでくるんだから狂ってる。熱全体を飲み込む口内も、口の中で轟く舌も、腰が砕けそうなくらい気持ちいい。中に入った指が、しつこく前立腺を引っかいてくるのもたまらない。ゾクゾク、ゾクゾクと震える腰が止まらなくて、既に身体は落とされたと言ってもよかった。

「んはああああ...！はう、ん、んっ、んんっ、んんんうううっ！」

「ん、ふふ、もうギリギリって感じになってる」

「っぐ、ッ、そ、そんな、こと...！」

「大丈夫、今日は一気にやろうと思ってないから。はい、少し休憩」

「ひく、う、は、は、はあああ...ッ！」

ただ、奴は落ちた身体を手なづけるのも得意だ。ほしい、ほしいとねだる熱に待ったをかける。絶頂まであと一步のところで指は抜けていって、口内に捕まっていた熱も解放された。それでも完璧に刺激がなくなったわけじゃなくて、孔の入口や、先走りの零れる先端を、指先や尖らせた舌の先で弄ばれる。くぱ、くぱ、と開閉する所をつつかれると、もどかしさで言ってはいけないことを口走りたくなった。欲しがるな、腰を押し付けるなと思うのに、へこへことみっともなく腰が揺れてしまう。

なんだよこれ。こんなのは休憩に入らない。いいように焦らされてるだけだ。

さっきイッておけば、少しスッキリしたのに。イケてないからもやもやする。溜まっていくだけの快感を吐き出したくなる。

気づいたら鼻をすすっていた。なんで泣きそうになってんだ。弱気になるなよ、今日は押せ押せのエロかわビッチでいかなきゃなのに。もう止めたくなってんじゃん。キャラを作ったんだからやりきれよと、心だけは堅い防御をはる。

「っ、うう、ふ、ふっ、ううう...！」

「どうしたの村井君。そんなに切なそうな声出しちゃって」

「ち、が、出してない...っ！」

「そうだよな。でもさっき、舐めるなとか、そこはだめって聞こえた気がしたからさ？少し休みたくなかったのかなって思ったんだけど」

「そっ、それは」

「違う？なら、僕の聞き間違いかな？そうだよな、ぐちゃぐちゃになるくらい濃い目にやりたいなんて言ってきたくせに、言った本人がこのくらいでめげるわけないよね」

「ッ、う、うゝう...！」

けれどガチガチに固めた守りの境目を見つけては、鋭利なナイフを刺される。退陣を迫られた側の一般兵みたいな気分だった。最悪だ、やっぱり少しでも隙を見せたら、この悪魔に揚げ足をとられてしまう。反抗するほどに結果が悪くなっていく。

敵陣に踏み込んだ時点で分の悪い勝負をしているのに、これ以上追い込まれるのはまずい。どうにか逆転しなければと、休憩のうちに頭を働かせる。でもアイツは、こうやって俺が挽回をはかろうとしたときに限って、快感で思考を乱してくるから最低だ。

「さあて、そろそろ休憩は終わりでいいかな？次はどんなふうに責められたい？リクエストがあれば聞くけど」

「え...？リ、リクエストなんて、別に」

「じゃあ僕が好きにしていってことか」

「や、待て待て待てッ！優しめのやつ！さっきより、優しいのが」

「へえ？村井君って、そういうのが好きだったっけ？まあいいや、君がしてほしいなら優しくしてあげる」

「くひい...ッ！？あゝっ、それ、や、めえええ...っ！！ああっ、あああああ
あっ！！」

奴が軽くリードを引けば喉が締まる俺は、もはや体のいいオモチャに等しい。面白半分に開かれた尻の谷間に、奴の顔が埋まっていく。まずいと思っても、さらけ出された孔の粘膜をねっとり舐めるあの感覚に、ガクンと力が抜けた。

最初の方にやられた、俺が苦手な舐め方だ。もどかしいのに気持ちよくて、慣れていないから抵抗できないやり方。それは嫌だって言ったのに。優しくなんかない。コイツは俺が苦手だって分かって、あえてやっている。

ヤバい、それを続けられたらヤバいと、必死に腰を上を持ち上げる。でも奴の両手で掴まれている上に、踏ん張りがきかない今の俺では、ほんの少しの距離を取るのも難しかった。

「ひ、っ、だ、だめ、それ、無理いいい...ッ！！」

「ほら、やっぱり嫌なんじゃない。無理して苦手なこと言わなくていいのに。優しくされたくないんでしょ、ほんとは」

「ん、あ、あ、ちが、あ、ほ、ほんとに、それだけが苦手でっ」

「本当に？でも僕、村井君が苦手なこと他にも知ってるよ？」

「え...？あ、あっ、くうゝううううっ！！？」

分が悪くなくてもいい、せめてギリギリ膝立ちできるうちに言える文句は言った方がいいと、俺は言葉で抗った。けれど奴は、更に俺の苦手なやり方を知っていると言う。なんだよ、お前のそれがガチなのか嘘なのか分かんねえから怖いんだってと身構えると、熱の先端を握った手が、ぐっと力を入れてくる。クパリと開かれた尿道口に舌先が付くと、チロチロと小さい穴を舐め始めた。襲ってきた鋭い快感は、小さな孔から背骨をつたって、瞬間的に頭のとっぺんまで駆け抜けていく。

「ひあ、ああああっ！！それヤバっ、あ、ひ、ひぎいいっ！！」

「村井君は、ここいじめられるの苦手って言ってたもんね？嫌々言いながら、あの時も散タイッてたけど」

「あふ、うゝっ、うううあああだめだめだめっ！！！！き、つい、きついからっ、舐めんなああっ！！」

鍛えることが不可能な、過敏な粘膜をくすぐられる。唾液を絡めた柔らかな舌が細かく動くのがたまらない。今度こそ明確に膝立ちできなくなった俺は、みっともないけれど四つん這いで伏せて、手に力を入れることで、腰を高く持ち上げた。それで奴の口から逃げようと思ったからだ。

でも奴は、普通に身体を下にずらすことで対処してきた。腰の位置が変わったところで、責める激しさは緩和されない。むしろ後ろの孔は隙だらけになったせいで、またしても指が入ってきた。ヤバい、尿道と前立腺の同時責めはマジで終わると、俺は身体を前に移動させた。でも目の前にあるのは、ベッドの上の縁。限られた移動距離があまりに短くて、ひぐ、と惨めな声が漏れた。

「や、やあ、も、あ、ひ、指、入れな、あう、ま、っで、待ってええっ！」

「なあに逃げてるの。そんなに激しくしてないのに」

「っ、あ、ふ、ううううう...ッ！！あ、あ、ッ、〜〜〜〜ゃああああ

あああっ！！」

ちゅう、と時々先端を吸いながら、執拗に尿道を舐められると、ぐんと背がしなる。いきんでしまうと、中に入った指がただでさえ良い場所を押しているのに、自分で締め付けてしまう。きつく食い込んだ指が前立腺を揉みこむ快感で、脳がバチバチと弾けていった。

なんてキツイ責め方だ。ひとつも、ひとかけらも優しくない。狂っている。いつもこの悪魔がイカれてると思うが、今日も奴にとっての通常運転が続いている。ダメだ、それじゃあまた犯されて泣かされるだけの日になってしまう。考えた作戦が活かせず終わる。

ここでイッたらなし崩しだと確信している俺は、せめてイク前に流れを変える必要があると思っていた。問題は、どうやって逃げるかだ。嫌と言って許してくれる相手じゃない。考えろ、とにかく短期決戦だ。押すか？こういう時に押さないから、俺はいつも負けてばかりなのか？

そうだ、今日は普段やらないことをめいいっぱい行う日。だったら止めろと言うなら、方向性を変えて責めてみるのはありだ。よし、思いついた、今日ならこの言い方も不自然じゃないと、どうにか踏ん張って下の方に手を伸ばした。そして夢中で俺の熱を舐めしゃぶっているクソ野郎の、1発出しても元気なモノを握る。

「な、なあ！やっぱり仙波さんのじゃないと、物足りないって...！早くくれよ、コレが欲しくて来たんだよ？まだ俺に入れてくれないの？」

柄じゃなく目を潤ませて、自分の下にいる奴を見る。でも手はゆっくり動かして、煽るように奴の熱を扱いた。びく、と反応を示すのが生々しくて嫌だが、どうやら効果はあったようだ。この変態にまだ人間らしい一面があってほっとする。

俺が普段なら絶対に言わない誘い方をしたのが案外よかったのか、奴は指を抜き、口も離して大人しくなった。今しかないと思った俺は、ささっと位置を変えて、奴の腹の上に腰を下ろす。これでひとまず孔の安全を確保できた。あとはどうにか、奴をその気にさせるだけだ。

「仙波さんは、俺に入れたくない？」

「そんなことはないよ？だけど言われてみれば、いつもはこんなんじゃないからなあ。村井君にはイマイチだったか」

「い、いや？イマイチってことはないんだけどさ？入れてもらわないと、俺的には満足できないってだけで」

「まあでも、そんなに焦らなくてもいいんじゃない？お互い明日は休みなんだから。それに僕もね、せっかく村井君が来てくれるならおもてなしをしなきゃと思って、君に喜んでもらえそうなものを用意してたんだ」

「は？用意って、何を？」

「君の下着ほどではないかもしれないけど、似合いそうなのを僕も選んでおいたんだよ」

だが、奴は腹の上にへたり込んで動けない俺を見上げて、謎の発言をかましてきた。なんだ、用意って。まさかまたエグい玩具でも買ったんじゃないだろうかと怪訝な顔で仙波クソ野郎を見ると、奴は枕の下に手を入れた。そしてゴソゴソとまさぐった後、手を引き抜く。

枕から出てきた奴の手には、太めの紐に丸い玉がついたようなものが握られていた。見たことのないそれに、俺は首を傾げる。

「...何それ」

「コックタイって言うんだけど、見たことない？海外では割とメジャーらしいよ」

「ふうん...？で、どうやって使うの、それ」

「シンプルに、村井君のここに通して、ぎゅってするだけ」

「おわっ！？」

コックタイと言う聞きなれない謎の紐は、言われてみれば確かにループタイに見える。首に巻くものより、大分短い。けれど用途を聞くなり、なんと奴は俺の下着の前の所をずらして、するりと輪になった部分を通してくる。いきなり何をするんだと言うよりも早くに、玉の部分を経ったコックタイが根元部分に巻きついてしまった。鮮やかな手つきには慣れが見えて、少し苛立つ。だが締められはしたが、ギチギチに締まった感覚はない。

「普通のコックリングだと、サイズによっては合わなかったりするからさ。こっちのほうが調整できて便利なんだよね。どう？痛くはない？」

「痛くはない、けど…」

「それなら丁度いいくらいだと思う」

ヘンテコなものを巻きつけられた熱は、違和感はあるけど痛みはない。けれど、おそらく射精を止めて勃起力を維持する目的をもったものにしては、塞き止められている感じも少ない。奴の言うように、コックリングよりも俺に合ったサイズ感になっているとは思うけれど、付けた意味がイマイチ分からない代物だった。どちらかというアクセサリーに近いものなのだろうか。腑に落ちないが、俺にとってマイナスにならないなら、特に指摘しなくてもいいだろう。

それに、少なくともこれでやられっぱなしの展開は避けられた。奴の隠し玉もネタ切れだろうし、お互い出し切ったところで本番といこうじゃないか。少し休めたおかげで、俺も復調してきた。今度こそ俺が責める番だと、守っていた腰を浮かせて、奴の熱に尻を擦りつける。

「なあ、もういいだろ？早く欲しいって」

「そうだね、これ以上待たせるのもかわいそうだし。あ、でも君が入れてくれるなら、こっちにお尻をむけて入れてほしいな。その下着をつけたまま、僕のを入れるところが見たいから」

「今日はそういう気分なんだ？いいよ、じゃあバックで入れてやる」

アタックし続けた結果、とうとう奴がやる気になった。よし、それなら俺にも勝ち目はある。見てろよ、今日こそケツで抱いてやると意気込みながら、身体の方角を変えた。反対に向き直って奴にまたがった俺は、尻を突き出してから、ゆっくり俺の熱にアイツの熱を擦りつけながら前進する。

「ん、は、ああああ...」

「っ、君ってそういうこともできたんだね...？」

「興奮するだろ？コレ」

ぬちゅ、ぬちゅ、と二人分の昂りをくっつけて、腰を前後に揺らす。ぐっと俺を押し返す熱が素直で、つい笑みが零れた。そうだよ、俺ってこんなこともできるだよ。お前にペースさえ握られてなきゃ余裕なんだと、ニヤつく顔を前にむけて、今度こそ尻を前に持っていく。

片手で奴のモノを握って、先端の位置を調整する。そして自分の孔に当ててから、ゆっくりと熱いそれを中に埋めていった。

「ふ、あ、あ...！あああああああ.....ツツ！！」

相変わらず、とことん俺と相性のいいそれが中を擦り上げてくる。入れる度に思うが、やっぱりモノだけは最高だ。中もモロに感じる俺としては、散々我慢してからコイツの熱を入れたのだから、当然快感の適正值は超えていた。腹に溜まっていたものが、ぐううっと押し上げられていく感覚がする。堪える間もなく出してしまいそうだと、背を反らしてその瞬間に備えた。

「うあ...！？あ、あ、っ、ぐっ...！？」

けれど、出てくるはずの精液は一気に出てこなかった。全く出なかったわけじゃないが、勢いが足りていない。なんだこれ、どうなってんだと自分の熱を見ると、どこか苦しそうに白い液体を零している。どうやら、コックタイが邪魔をしてうまく出せていないらしい。

びゅ、びゅく、と不満げに回数を増やして射精をするのがもどかしい。一息に出せないもやもやを抱えた俺は、妨げになっているコックタイに手を伸ばした。

「な、なあ？なんかうまく出せないんだけど...」

「それはそうでしょ。なんのために付けたと思ってるの」

「や、でも、中途半端に出すのもきつって。もうちょっと緩めても」

「ダメだよ、何してるの？」

「うあっ！？」

だが俺の意見はあっさり跳ねのけられて、それどころか手首を掴まれて後ろに引っ張られた。アイツに手を引かれたせいで自分の熱に手が届かなくなったし、腰が強制的にくっつくのも嫌だ。騎乗位で自分優位に動けると思っていたのに、これじゃあ腰を浮かせることもままならない。

まずい、このままだと俺は射精の自由も減ったのに、手の自由もなくなる。既に一回イッて過敏になった今、コイツに主導権を握らせたら終わりだ。せめて動きの制限だけは軽くしようと、俺は強引に前進して、奴から遠ざかろうとした。

「ん、な、なにすんだよっ！離せ！」

「動けなくしちゃってごめんね？お詫びに、村井君の好きなところだけ当て擦りしてあげる」

「ひっ、い、いうっ！！？ッ、く、うう、あゝっ、いい、そこはあんまりっ」

「ほら、そんな風に恥ずかしがらなくていいから。もっとこっちにおいで」

「んんんうううううゝっ！！！！？」

でも、危機感を持つのが遅かった。本当なら、多分コックタイを付けられる前に拒否すべきだったんだ。入れてからでは間に合わない。しかも手も拘束された後なら、なお遅い。

手が引かれて、ばちゅんと音がするほど強く、奴の自身が打ち付けられた。そして宣言通り、俺のいい所を狙いうちしている。お前も上手く動けない体勢のはずなのに、なんでそんなに器用に当てられるんだ。セックスは下手でいいよ、お前の場合とは心の中で文句が吹きあがったが、同じタイミングでさっき出しそびれた精液の残骸も出てきた。どうやら一気に出せない分は、何度も出すことで調整しているらしい。

ふざけんな、じゃあ射精したまま擦られるってことかよと、目の前にチラつく絶頂地獄に青ざめる。だけれど外れてほしい未来ほどの的確に現実化していくのは、奴の得意分野だ。

「ふあ、あゝ、ああんんんううう...ッッ！！ひ、い、ッ、や、い、今、出てる、さっき、ちゃんとイケて、な、あ、あああああっ！」

「でも、出せてはいるんでしょ？それなら問題ないんじゃない？」

「ふ、ぐっ、ああ、そこ、あ、やっ、あっ、っくうう...！ん、んんっ、ッ、は、外せよ、少しはあ！」

「ここを狙わないで欲しい理由を、君の口から正直に言えたらやめてあげてもいいかな？」

「ッ、っつき...！あ、あ、まっ、や、ああああっ！い、イク、だめ、今だめ、やめろっ、やめろってえええっ！！」

怖いくらい正確に、弱点だけが擦られていた。小刻みに集中攻撃されるせいで、一秒たりとも休ませてもらえない。そのせいで、何とかさっきイッた分は出せたと自覚した時には、既に次の絶頂が迫っていた。苦しい、早くイキたい。でも、イッてもなかなか出せなくて苦しむことになる。その間に、このクソ野郎が動きを止めてくれるわけでもなさそうだ。

それに、コイツの言うことを素直に聞いて、前立腺を外してほしい理由なんか言ったところでだ。「感じ過ぎてイキそうになるから止めてくれ」と馬鹿正直に言ったら、奴は喜んで腰を動かすに決まってる。コイツがベッドの上で裏切ることは定石だ。元々言うつもりはないけれど、信じられるわけがない。

つまり、俺がどんな行動を起こしても、奴は前立腺を狙うのを止めない。だから快感を与えられ続ける俺は、射精へと向かっていくしかない。ああ、イク、もう出ると唇を噛めば、ぐぐ、と膨らんだ熱が、再び情けなく精液を垂らした。

「ふ、う、ううううううっ！！んあ、あ、あう、やあ、あ、で、出て、る、ッ、ま、っで、今、まっ、あ、あああっ！」

「イッてる村井君の中って、締まってて最高にいいんだよね。病みつきになっちゃうなあ」

「はふ、う、うゝっ、ん、んんん...っっ！あ、は、はっ、あゝ、あああああああ...！！」

ぼたっ、ぼたっ、と、絶妙に勢いを失った精液が出ては、俺の太ももを伝って下に流れていく。そしてイッている間にいい場所を擦られる快感は強烈で、全身が常に緊張するくらいには感じさせられた。喘ぎ声が漏れっぱなしで、呼吸するのが難しいくらいだ。

ひ、ひ、と泣いて苦しむ間も射精が続く。イケるのにイケていないような、未経験の射精に戸惑う。心の中では一回のはずなのに、身体的には何度もイッているみたいだ。本来は長くても数秒で終わるべき射精の快感が、延々続く。おかしい、これじゃあ今イッている分が終わる前に次が来てしまう。やめろ、動くんじやないと腰を浮かせて抵抗したいのに、想像以上に力強い奴からは、もう逃げる事ができなくなっていた。

「あ、あっ、や、あゝ、もっ、もう、イッ...！っ、くうっ！あ、あ、んんっ！ンンンッ！！」

「あんまり続けてたら、村井君がイッてる間にまたイッちゃうかな？人って、何回分の射精なら蓄えておけるんだろうね」

「い、いあっ、あああっ！！ひ、ぐ、ううっ！んううううううっ！！」

にちゅりと、音を立てて擦られる1回分が重く感じる。もっと激しく犯された経験もあるのに、絶頂が停滞した中で犯されるのは初めてで、未知に身体が怯えていた。対処法を知らない俺は、ただ快感を受け入れることしかできない。

だら、だら、と精液は零れっぱなしだった。それが何回目の射精にあたるのかも分からないし、あとどれくらい出せば回数がリセットされるのかも分からない。ただ分かるのは、今のように擦られっぱなしでいるうちは、この地獄が終わらないことだけ。

「んぐううう...ッッ！！はぁっ、あ、あゝ あぁぁあぁぁあ...！や、あ、も、お、ッ、〜〜〜〜っ！！」

逃げられないのに、どうにか逃げようと背がしなる。でも反らした背を、つつ、と悪戯に舌先でなぞられた。それだけで身体が大きく震えるくらいには、イキすぎて過敏になっている。

だけど、まだ。それでも意識を保って耐えるくらいはと、歯を食いしばった。いつかまた、俺にとって挽回のチャンスがくるかもしれない。だからその時までには、心が折れないよう自分を奮起させる。

でも奴は、そうやって抗う俺を地に突き落す方法を知っている。

「ねえ、村井君は知ってる？自分がどういう風に犯されるのが一番好きか」

「っ、は、あ...？な、に、言って」

「分からない？じゃあ、僕だけが知ってるのかな？」

「んんうっ！？」

急に奴から手を離されたかと思うと、ドンと身体を後ろから押された。そのせいで、前に上半身がつんのめる。慌てて手を前に出して倒れるのを食い止めると、なぜか奴も俺にくっつくように覆いかぶさってきた。そして再び手を取ったかと思うと、俺の身体を起こしながら、さっきと同じように後ろに手を引いてくる。

「は？ なっ、なにして」

「村井君はね、こうやって立ち膝でいいところ挟ってあげると嬉しそうにするんだよ？ こんな風に、ぐりっ、ぐりって感じで」

「ぐっ、はううううっっ！！！！？」

立ち膝バックの体勢で、背後の奴からいい場所を挟られた。前立腺を、凶悪な力りで削られる。それだけでビリビリと脳が痺れた。今までは射精にばかり囚われていた意識が、一気に内部にもっていかれる。ガクンと反り返りそうになる身体を無理矢理後ろに引かれて、もう一度擦られたら息も止まりそうだ。

「んひいいッ！？ あ、あ、あんんうううっ！！ひ、あゝっ、やあ、ま、っで、キツい、これキツいいいいっ！！」

「うん、知ってる。村井君ってちゃんと意識のあるうちは、あんまりこの体勢でやらせてくれないんだよね。だからいつもは、君がもうろうとしてる時限定のやり方かな？」

「ッ、ん、んんっ！！っは、あ、あう、や、やだ、も、んゝっ、んああああああっ！」

「でも、今日は欲しがりな日なんだもんね？たまには君の意識がはっきりしてる時に、大好きな責め方で抱いてあげたっていいよね？それが君のリクエストなんだから」

「あっ、あゝッ、や、う、んっ、ッ！！っふ、あ、イッ、イク、イク、いやああイクイクイクうううっ……！！！」

何度か甘く擦られるだけでも、集中責めされた内部はいい反応をしてしまって、あっけなく中イキしていた。その最中に責めを緩める判断をしないクソ野郎のせいで、俺はイッている間も前立腺を挟まれ続ける。無理だ、キツイ、マジで良すぎると、身体が勝手に逃げようと前のめりになる。ただ、その程度の抵抗で逃げられるわけもないから、こら、とたしなめられて引き戻される。強く当たったときの方が快感が重くなるのに、逃げたくなるのは無意識だから、何度も何度もイッている間に追い打ちをかけられた。

さっきイッた射精の名残も吐き出しているのに、中イキも一緒に与えられるなんて。畜生、終わらない、どっちもイクのが全然止まらない。気持ちいい感覚が、もっと気持ちいいことで上塗りされていく。これだ、俺はこれが嫌なんだ。本当は快感を追うのは好きなはずなのに、コイツという時だけは恐怖に変わる。

「ふあああっ、あ、あ、あああああっ！やあっ！は、なせ、も、離せよおっ！！」

「段々余裕がなくなってきた？かわいいね。もう無理になっちゃったの？」

「ッ、ぐ、う、んんんんゝッ…！！」

「まあ、僕も鬼じゃないからね。どうしても離せって言うなら、離してあげてもいいよ」

「うあっ！？」

イキすぎておかしくなる前に、なんとしてでも奴から離れる必要があった。そのために腕を振ったり、渾身の力を込めて振りほどくと、なぜかパッと解放される。それが予想外ではあったけれど、してやったりとすぐに手を前に伸ばした。掴まれなければこっちのもんだ。

だが、相手は鬼より極悪非道だった。禍々しい手は俺の手首こそ掴まなかったが、脇の下から腕を通してくる。そして力を入れられると、ほんの少し離れた距離は一瞬で詰められて、また奴と密着する体勢になった。しかも今度は、片方の手だけを上半身の拘束に使い、もう片方は俺に悪戯をする手に変わった。意志を持って責める指は、迷いなく俺の乳首へと刺激を加えてくる。

「ひゅっ！？あ、ば、か、何、してえ...っ！」

「今日はここ、まだ触ってあげられてなかったから。寂しがってるかなと思って」

「っ、な、わけな、あ、ひ、ど、どれかにしろっ！全部は無理だ！」

「ん～、そんなこと言われてもなあ。僕、欲張りだから選べないや」

「はふ、う、んんんうううっ！！」

クリクリと尖った飾りを弄ばれた。その手つきが明らかに本気じゃないと分かるのに、感じてしまう自分が悔しい。上半身に巻きつく腕に力を込められると、嫌

でも奴と身体が触れ合う。深く入り込む熱が、どんどん奥まで入り込んでいるのが分かった。このまま侵入を許したら、前立腺よりもっと深く感じる場所まで進んでしまいそうだ。

ぎりっと歯を食いしばる。こんなはずじゃなかった。本当は上手く誘って、俺が欲しがることで、コイツに嫌がらせをする予定だったんだ。でもこれじゃあ感じ過ぎて、演技する余裕はない。負ける、このままイキ過ぎて負けてしまう。嫌がらせはすべきだ。コイツと縁が切れるならなんでもしようと思ってここに来た。だが、もし負けたら。俺にとってこの場所は、あまりにも恐ろしい所だ。

ホテルや俺の部屋ならまだ地の利があるのに、今日は敵陣のど真ん中。ここで負けが確定した場合、一体どんな苦渋が待っているか分かったもんじゃない。この際、演技も作戦も放棄だ。とにかく負けないこと。これにだけ重きを置こうと、俺は考えを切り替えた。すかさず肘を後ろの相手にぶつけまくって、物理での抵抗を試みる。

「く、くそっ、嫌だ！んぐっ、う、あ、あッ、も、やめろっ！もういいからっ！！」

「どうしたの、急に暴れて。ていうか、もういいって何？元はと言えば、君が仕掛けてきたんじゃない。エッロい下着まではいてきて。こんなに誘っておいて、今さらやめろはないよね」

「はふ、ううううう.....ッッ！！！！？」

けれど俺が暴れたら、乱暴な腕は無視して、無防備に飛び出た熱に手がのびてきた。ゆっくり包み込まれた場所の先っぽを、親指の腹で擦られる。精液の零れる

孔を優しく撫でられると、全身の力が一気に抜けた。殴るはずの腕が崩れて、ずがるように奴の腕を掴んでしまう。

「あ、あ、や、やめ、ろ、触るなああ...っ！」

「とろとろだ、ここ。でも、まだまだイキ足りないよね？」

「ッ！いい、もういいって言ってんだろ！」

「遠慮しなくていいよ。何にも出なくなるくらい、どろっどろにしてあげる」

「んひっ、い、ああっ！やあああああああっ！！」

ー続きは本編にてお楽しみくださいー